

BRICsの経済規模はいつ日本を超えるか？

～日本のGDPは2017年に中国に抜かれ、2028年にはインドにも抜かれる～

発表日：2005年5月27日(金) (No. A - 18)

第一生命経済研究所 経済調査部

担当 門倉 貴史(03-5221-4548)

～要 旨～

- 各国のGDP成長率は、人口成長率と1人あたりGDP成長率の和に等しい。日本をはじめとする先進諸国では、少子化の影響で人口増加に歯止めがかかり、また経済の成熟化に伴い1人あたりGDPの伸びも鈍化しつつあるため、GDP成長率のスピードはトレンドとしてスローダウンしている。その一方、近年のBRICs経済では、人口成長率と1人あたりGDP成長率がともに加速しており、両者を合算したGDP成長率は年々高まりつつある。
- いくつかの前提条件を置いて、BRICsのGDPが将来的にどのように推移していくかをシミュレーションすると、BRICsの経済規模は2004年時点で3.5兆ドルと、G7(25.9兆ドル)の13.4%程度の大きさにとどまっている。しかし、今後は成長率が加速度的に高まり、2035年時点で62.6兆ドルと、G7(62.0兆ドル)の経済規模を上回る。そして、2036年以降はBRICsの独走体制となり、じわじわとG7との距離を広げていく。
- では、日本の経済規模はどの時点でBRICs各国に抜かれるのだろうか。シミュレーション結果に基づくと、まず、2017年の段階で中国に追い越されてしまう。また、その11年後の2028年になると、今度は成長著しいインドに追い越される。さらに、2041年には資源供給で高成長路線に入ったブラジルが日本の経済規模に追いつく見込みだ。ただし、ロシアについては、日本よりも早いスピードで人口の減少が続き、1人あたりGDPの成長速度も少しずつ鈍化してくるため、予測期間を通じて日本の経済規模を下回って推移するだろう。
- 30年後には、世界経済の勢力地図が塗り代わり、BRICsが経済の中心にのし上がってくるわけだが、1人あたりのGDPでみると、その水準はなお低いレベルにとどまる。たとえば、2035年における日本の1人あたりGDPの水準を100とすれば、ロシアは55.4、中国は39.3、ブラジルは37.6、インドは16.5にすぎない。経済規模の面で先進国を凌駕するようになって、BRICs各国で生活する国民が、真の「豊かさ」を実感するのは、ずっと先のことになりそうだ。

BRICsの経済規模は2035年にG7を超える

各国のGDP成長率は、人口成長率と1人あたりGDP成長率の和に等しい。日本をはじめとする先進諸国では、少子化の影響で人口増加に歯止めがかかり、また経済の成熟化に伴い1人あたりGDPの伸びも鈍化しつつあるため、GDP成長率のスピードはトレンドとしてスローダウンしている。その一方、近年のBRICs経済では、人口成長率と1人あたりGDP成長率がともに加速しており、両者を合算したGDP成長率は年々高まりつつある。先進国とBRICsが、このままのペースで成長を続けていけば、いずれはBRICsが現在の経済大国であるG7の経済規模を超えることになるだろう。

試みに、いくつかの前提条件をおいたうえで、BRICsのGDPが将来的にどのように推移していくかをシミュレーションしてみよう。

ここでのGDPの大きさは米ドルで換算した名目ベースで評価することとし、人口が国際連合の推計人口(中位推計値)に沿って推移していく。各国の1人あたりGDPがロジスティック曲線に沿って推移していく(水準が低い段階では成長率が逡増し、水準が高くなると成長率が逡減する) 予測期間中にアジア通貨危機

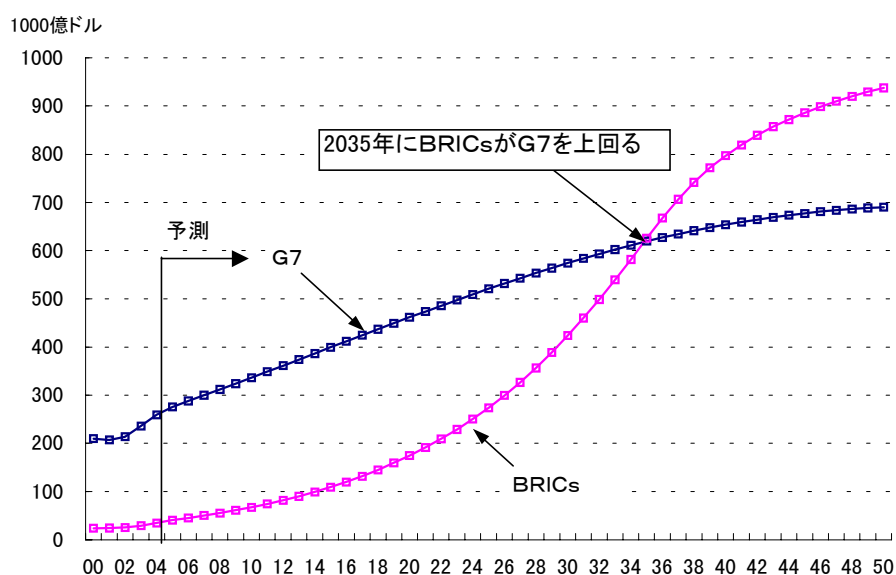
のような外生的なショックは発生しないことを前提とする。

シミュレーションの結果は、図表1に示したとおり。これによると、BRICsの経済規模は2004年時点で3.5兆ドルと、G7(25.9兆ドル)の13.4%程度の大きさにとどまっている。しかし、今後は成長率が加速度的に高まり、2035年時点で62.6兆ドルと、G7(62.0兆ドル)の経済規模を上回る。そして、2036年以降はBRICsの独走体制となり、じわじわとG7との距離を広げていく。

G7 + BRICsの11ヶ国で経済規模を比較すると、2004年時点でのGDPの大きさは、第1位が米国、第2位が日本、第3位がドイツ、第4位がイギリス、第5位がフランスであった(図表2を参照)。しかし、2035年になると、第1位の米国(38.2兆ドル)は変わらないが、2位以下の顔ぶれが大きく変わってしまう。すなわち、第2位に中国(36.5兆ドル)が、第3位にインド(15.9兆ドル)が急浮上。2004年は世界第2位であった日本のGDP(7.7兆ドル)は世界第4位へと後退する見込みだ。しかも、そのすぐ後の第5位にはブラジル(5.9兆ドル)が、第5位にはロシア(4.3兆ドル)が控え、米国と日本以外のG7加盟国は、経済規模においてBRICs各国の下位に位置することになる。

2004年から2035年にかけてのGDPの変化をみると、米国が3.3倍、日本が1.7倍の拡大にとどまるのに対して、ロシアは7.4倍、ブラジルは9.8倍、中国は22.1倍、インドにいたってはなんと24.0倍にまで拡大する。

図表1 BRICsとG7の名目GDP将来予測



(出所) 国際連合資料、IMF資料などに基づき試算

(注) シミュレーションの前提は以下のとおり。各国の人口が国際連合の将来推計人口(中位推計値)に沿って推移していく。各国の1人あたりGDPがロジスティック曲線に沿って推移していく(水準が低い段階では成長率が逡増し、水準が高くなると成長率が逡減する)。予測期間中にアジア通貨危機のような外生的ショックは発生しない。

図表2 2004年と2035年のG7 + B R I C s 経済規模ランキング

2004年			2035年			
順位	国名	名目GDP(10億ドル)	順位	国名	名目GDP(10億ドル)	04年対比(倍)
1	米国	11733	1	米国	38224	3.3
2	日本	4668	2	中国	36496	22.1
3	ドイツ	2707	3	インド	15888	24.0
4	イギリス	2126	4	日本	7729	1.7
5	フランス	2018	5	ブラジル	5855	9.8
6	イタリア	1681	6	ロシア	4338	7.4
7	中国	1649	7	ドイツ	4266	1.6
8	カナダ	996	8	フランス	3576	1.8
9	インド	661	9	イギリス	3280	1.5
10	ブラジル	600	10	イタリア	2699	1.6
11	ロシア	583	11	カナダ	2177	2.2

(出所) 国際連合資料、IMF資料などに基づき試算

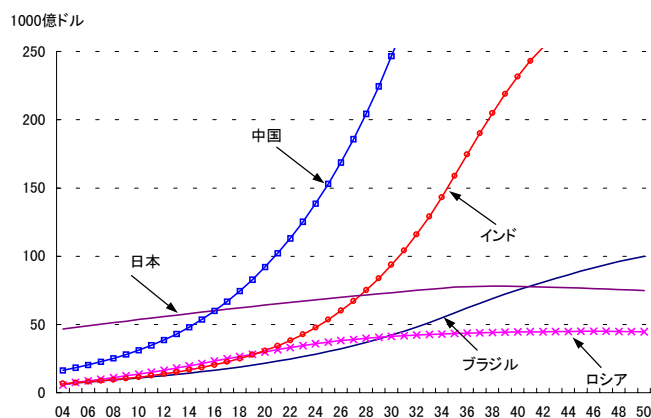
日本のGDPは2017年に中国に抜かれる

では、日本の経済規模はどの時点でB R I C s 各国に抜かれるのだろうか。先のシミュレーション結果に基づくと、まず、2017年の段階で中国に追い越されてしまう(図表3を参照)。また、その11年後の2028年になると、今度は成長著しいインドに追い越される。さらに、2041年には資源供給で高成長路線に入ったブラジルが日本の経済規模に追いつく見込みだ。ただし、ロシアについては、日本よりも早いスピードで人口の減少が続き、1人あたりGDPの成長速度も少しずつ鈍化してくるため、予測期間を通じて日本の経済規模を下回って推移するだろう。

なお、2040年代には、中国が米国を抜いて世界最大の経済大国になっている。2050年時点の中国の名目GDPは48.4兆ドルに達し、日本(7.5兆ドル)の6.5倍に及ぶ。

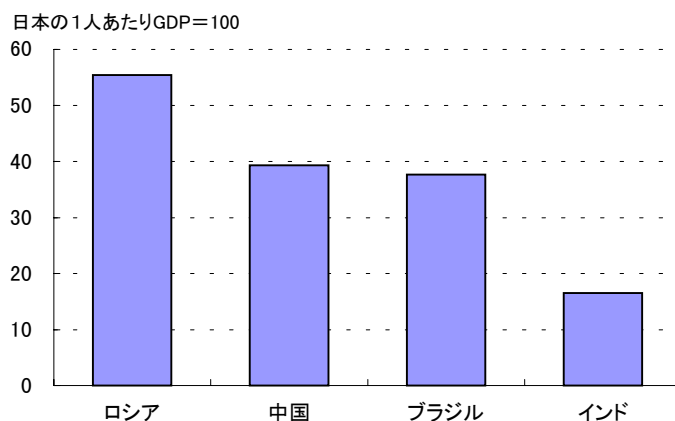
このように30年後には、世界経済の勢力地図が塗り代わり、B R I C s が経済の中心にのし上がってくるわけだが、1人あたりのGDPで見ると、その水準はなお低いレベルにとどまる。たとえば、2035年における日本の1人あたりGDPの水準を100とすれば、ロシアは55.4、中国は39.3、ブラジルは37.6、インドは16.5にすぎない(図表4を参照)。経済規模の面で先進国を凌駕するようになって、B R I C s 各国で生活する国民が、真の「豊かさ」を実感するのは、ずっと先のことになりそうだ。

図表3 B R I C s 各国のGDPが日本に追いつく時期



(出所) 国際連合資料、IMF資料などに基づき試算

図表4 2035年の1人あたりGDP



(出所) 国際連合資料、IMF資料などに基づき試算

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。

【補足】実力レート換算でBRICsのGDPが日本を抜く時期は？

外国為替市場で決まる為替レートを使って、米ドル換算した各国の名目GDPランキングをみると、2004年は、米国を筆頭に、日本、ドイツ、イギリス、フランスの順になっている。BRICsについては、中国の第7位が最高で、インドが12位、ブラジルが14位、ロシアが15位だ(付表1)。

しかし、各国の名目GDPを米ドルに換算する際に利用する通常の為替レートは、貿易取引や投機の影響を受けて短期的に大きく変動する。また、中国のように自国の通貨を米ドルに固定している国では、為替レートの水準がその国の経済の実力を十分に反映していないという問題が生じる。そこで、各国の経済の実力を反映するといわれる購買力平価(PPP)で換算した各国の名目GDPのランキングを見てみよう。購買力平価とは、各国の通貨の購買力が等しくなるように調整した各国通貨の交換比率のこと。2004年のランキングをみると、先の通常レートで換算した場合と比べて上位の顔ぶれが大きく変わってくる。第1位は米国で変わらないが、第2位に中国が浮上し、日本は第3位に後退してしまう。中国の経済規模は7兆3340億ドルと、日本(3兆8170億ドル)の1.9倍にも及ぶ。通常の為替レート換算では第12位であったインドは一気に第4位まで上昇する。そのほか、第9位がブラジル、第10位がロシアと、BRICsが全てベストテンに入ってくる。実態としてみれば、中国の経済規模は1995年の時点で日本を追い抜いていたことになる。実力レートで換算すると、他のBRICsが日本の経済規模を追い越す時期もそう遠くはない。まず、インドが06年に日本のGDPを上回る。その後、ロシアが2014年に、ブラジルが2020年に日本の経済規模を上回ることになる(付表2)。

付表1 世界のGDPランキング(2004年)

通常の為替レートで換算したGDP

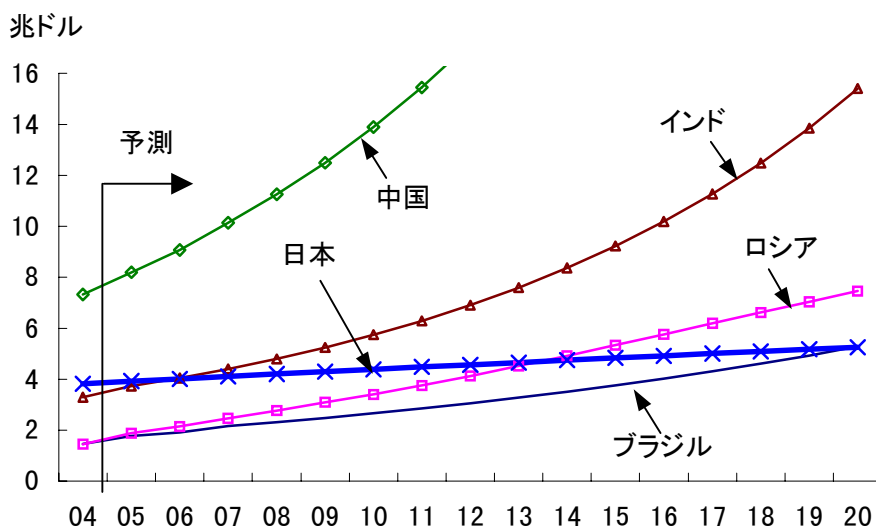
順位	国名	名目GDP(10億ドル)
1	米国	11,733
2	日本	4,668
3	ドイツ	2,707
4	英国	2,126
5	フランス	2,018
6	イタリア	1,681
7	中国	1,649
8	カナダ	996
9	スペイン	993
10	韓国	681
11	メキシコ	676
12	インド	661
13	オーストラリア	618
14	ブラジル	600
15	ロシア	583

購買力平価で換算したGDP

順位	国名	名目GDP(10億ドル)
1	米国	11,605
2	中国	7,334
3	日本	3,817
4	インド	3,291
5	ドイツ	2,392
6	英国	1,736
7	フランス	1,725
8	イタリア	1,620
9	ブラジル	1,462
10	ロシア	1,449
11	カナダ	1,050
12	韓国	1,030
13	メキシコ	1,005
14	スペイン	972
15	インドネシア	801

(出所) IMF 資料などより作成

付表2 実力レート換算でBRICsのGDPが日本を抜く時期



(出所) 国際連合資料、IMF資料などに基づき試算